

学びを「編集」する発想

みなさんが手にとっている「かわらばん」の紙面には、いろいろな記事が収まっています。限られた紙面の中にさまざまな要素をどのように並べるか、それを工夫するのが編集担当の腕の見せどころです。

どのような記事をどう並べるかによって、紙面の趣きが大幅に違ってきます。重いものと軽いもの、まじめなものと愉快なもの、目立つものと地味なもの、多様な取り合わせにより、それぞれが単独で示されるときよりも大きな輝きを放ちます。紙面に限りがあるからこそ、純粹さや一貫性よりも、思いがけない組み合わせが活きてきます。また、中身が同じならどんな風に並べても同じこと、というわけではありません。

こうした「編集」という手続きは、新聞や雑誌といったメディアの外にも広げて、服の組み合わせ、お弁当の中身、iPodに入れる楽曲から、専攻や研究テーマ、生涯かけて追

求すること、さらには人生に至るまで、およそ人間に関わるものすべてにあてはまります。実は、ふだんの生活の中でそれと意識することなく、編集に携わっているのです。いずれも何かを選んで、空間であれ時間であれ、限られた広がりの中に並べるといふ行為です。

何かを選ぶということは、他を捨てることを意味します。私たちが、一瞬のうちに無限の対象を認識したり、永遠を生きたりする超越的な存在であつたりしないからこそ、限りある小さな容器に盛られたものが、計り知れない価値をもつてくるのではないのでしょうか。編集は、その選びとったものの組み合わせや配列に工夫をこらして、与えられた限界を逆手にとり、いつそう輝かせようとしています。こう思うと、ノリとハサミで切り貼りする小手先の技術といつて、編集を軽く見るわけにいきません。

この編集という考え方を大学教育に適用するとどうでしょう。組織の改編、教育体系やカリキュラムの編成が、すぐ頭に浮かびます。しかし、もっとこの考え方が求められているものがあるように思えます。それは学生たちの、限られた時間という容れ物に、どのような中身をどう盛りつけるかということです。

編集というプロセスを通じてしかるべく選択され、配列された中身は、その総和以上の大切な何かが付け加えられています。というのも、個々の部分がお互いに引き立てあつたり、組み合わせの妙による相乗効果をもたらしたりするからです。あえて身近な例えを使うなら、4番バッターばかり並べたチームは、どんなに強くても野球の楽しさというプラスアルファが生まれません。この付け加えられる何かは、たとえば授業時間と課外の学習時間、そしてこれらをもとに換算した履修単位という数量からは見えてこないものです。それは、一貫性、体系的、多様性といった質の問題とも異なります。

一日、一週間のスケジュールをどう構成するか、ということから始まり、12ヶ月という時間を、さらには学部から大学院、そしてその先という時間をどう使うか。つまり各人に与えられた可能性をいかに編集するかという発想は、単に数量的な指標だけでは測れない、この限りある生をどのように豊かにするか、という問いとつながる価値判断に支えられています。個々の学

生がもっともふさわしい学びを編集できるように、大学として何を提供できるのででしょうか。メニューの豊富さ、個々のコンテンツの充実と並んで、このようなことを考えてみるのも、価値ある課題だと思えます。メニューが豊富で、コンテンツが充実しているほど、編集という発想が生きてくるはずですよ。

(木俣元一)

今年も開催します!

名古屋大学学生論文コンテスト 学問のススメ、論文へススメ。

論文内容：現代の社会問題にそくしてテーマを設定し、文献を十分に活用して論じる
応募資格：名古屋大学に在籍する学部学生
応募締切：2010年1月15日(金)13時

詳細はwebサイト (<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/ronbun/>) にてご覧いただけます。授業等を通じて学生への告知にご協力いただきたく宜しくお願いいたします。

「大学教員をめざす君へ」を開催しました

高等教育研究センターでは2009年度大学教員準備プログラム「大学教員をめざす君へ」を8月6日(木)・7日(金)に開催しました。会場となった情報文化学部棟の講義室には博士後期課程の学生を中心に、ポスドクや非常勤講師の方も含めて32名が集まりました。FD・SDコンソーシアム名古屋の事業として実施したことから中京大学、南山大学、名城大学からの参加者が11名あり、研究科や大学を越えた交流の場にもなりました。

当センター主催の大学教員準備プログラムは、もともとランチタイムのセミナーとして始まり、その後、2日間集中ワークショップに衣替えして3年目になります。これまでの参加者の意見をもとに「多様な高等教育機関」「大学教員のライフサイクル」といったセッションを新設するなど、改善を繰り返してきました。教育・研究・社会サービス・組織運営などにまたがる大学教員像を全体的に理解してもらいたいと、「研究のマネジメント」「アウトリーチに取り組む」、さらには「大学教員という職業」「大学教員の倫理」といったセッションも提供するようになり、内容が充実してきています。



模擬授業に挑戦

海外では正課授業として提供されることもある大学教員準備科目。日本ではどのような形で定着してゆくのが望ましいのか、当センターでは次なる展開を模索し始めています。

(齋藤芳子)



グループ討議

かわらばんへの皆さまのご意見・ご感想を裏面のEメールアドレスまでお寄せください

Higher Education Glossary

高等教育にまつわる用語集

コースパケット Course Packet

大人数の授業では資料を配付するのも、準備するのも一苦勞です。そこで便利なのが、「コースパケット」を作っておくことです。コースパケットとは、授業（コース）を通して学生に配布する資料や情報をひとまとめにして開講時に配布するというものです。たとえば次のようなものが含まれます。

- ・受講生に配布する詳細なシラバス
- ・発展的な学習のための参考文献ガイド
- ・予習のための教材（論文のコピー、新聞の切り抜きなど）
- ・授業中に使用する教材
- ・復習のための教材（練習問題、ヒント、解説、解答例など）
- ・成績評価の対象となる課題資料
- ・質問カードやコメント用紙

教員にとってコースパケットを作成・配布することのメリットは、毎週のように配付資料を準備したり、「先々週のプリントをください」と要求する学生への対応に追われたりする必要がなくなることです。学生にとっても、コース全体を通してどのくらいの課題があるのか、どれだけの学習量を求められるかを把握することができます。

コースパケットは小冊子にしたり、バインダーで綴じたり、さまざまな形態が考えられます。受講生が多い場合は生協の印刷部にまとめて発注したり、自作教材で未刊行の場合はダウンロード可能なファイルの形でウェブ上に載せて、受講生に自分で出力させたりすることもできます。

コースパケットを作成する際は配付資料の著作権に留意する必要があります。教育目的の場合に限り、他者の著作物を複製・配布することが特例的に認められています（著作権法第35条）。この場合も出典を明記し、あらかじめ著者の了解を得ておくのが望ましいでしょう。配布対象は受講生に限定され、無料であることが条件です。教員によるこうした配慮は、著作権に対する受講生の意識を高めるきっかけにもなることでしょう。コースパケットには様々な可能性があるのです。（近田政博）

読んでおきたい この1冊

Great Books on University

『就活のバカヤロー』

石渡嶺司・大沢仁 著 光文社新書

「就職活動があるので、授業を欠席させていただきま

す」と学生に言われたことはありませんか。大学の教育活動を妨げる就職活動の現状に不満を持つ教員は多いのではないのでしょうか。本書は、企業の人事担当者、大学教職員、学生、就職情報会社、就活コンサルタントなどへの取材をもとに、学生の就職活動の現状に迫っています。そして、筆者である2人のジャーナリストは、学生の就職活動は「茶番劇」としてと結論づけています。2008年11月の発行

後1年も経たずに、発行部数は10万部を超えています。私がこの本を薦める理由はいくつかあります。まず、「バカヤロー」と表紙に書かれた本を大学の教職員

の大半は手に取ってないのではと考えたからです（吉田茂もアントニオ猪木も登場しません）。私自身も他の教員から薦められなかったら読む機会はなかったと思います。また、現在の就職活動の生々しい実態を把握でき

ます。学生、大学、企業、就職情報会社のそれぞれの視点から就職活動が分析されています。マニュアル化した恥ずかしい学生、就職実績に右往左往する大学、広告という側面の強い企業の採用活動やインターンシップ、学生や企業を煽る就職情報会社などの実態が、臨場感をもって描き出されています。本書で「就職支援では特筆なし」と書かれた名古屋大学のキャリア支援体制を考える視点を提供するでしょう。

さらに、学生に推薦できる一冊でもあります。就活マニュアル本を読んで、中途半端な自己分析や他人の真似をしようとする学生には、客観的に就職活動を見つめ直すきっかけを与えることができるでしょう。もともと大学生も読者の対象に入っているの

で、読みやすく書かれています。（中井俊樹）

大学院生TAが授業と成績評価を担当——フランスのTA制度

TA制度は、日本の大学に定着した感があります。とはいえ、その内容は諸外国の制度と比較すると、いくつか特徴があります。その一つは、日本のTAの業務は授業用の資料の準備・作成、出欠の確認、レポート回収等の授業補助ということ

です。授業を単独で行うことは認められていません。背景には、①TAが主として大学院生であり、授業担当の能力に欠ける、②授業を行う上で必要な研修を受けていない、等の事情があります。TA制度といえば、まずアメリカが思い出されますが、類似の制度はフランスにもあります。フランスのそれは「モニター制度」(monitorat)と呼ばれ、この「モニター」は正規の授業(少人数による演習・実験)を担当します。年間64〜96時間(週あたり2〜3時間)という制限付きですが、担当した授業については単独で成績評価も行います。

モニターは大学院生の中から採用されます。その点は日本と同じですが、モニターになるには、一定の選抜をクリアする必要があります。 「研究手当」と呼ばれる特別奨学金を受給していること、その上で審査を受けることが条件です。研究手当の受給率は、試算で博士課程在籍者の2割程度なので、対象者はかなり限定されます。また年間10日間の研修を受けることが義務づけられています。この研修は、共同利用機関の「高等教育入門センター」(CIEES)で、大学教員が担当しています。

日本のTA制度は授業補助で業務範囲も限られ、謝金もわずかです。授業経験を積むこともできず、研修機会もないため、教員として不可欠の教授能力を獲得できません。そのため、大学院生にとってさほど魅力的な仕事とは言えません。将来大学教員を志す大学院生にとって授業を担当することは、自らのキャリア形成にプラスになります。同時に新鮮な感覚と教育に強い意欲をもつ彼らの授業を受けることは、学生にとってもプラスになるはずです。大学教育の改善が求められている今こそ、若い大学院生の活力を活かせるように、TA制度を見直すことが必要ではないでしょうか。（夏目達也）

高等教育研究センタースタッフ (2009年10月現在)

センター長	木俣元一
	専門領域：西洋中世美術史
教授	夏目達也
	専門領域：高等教育学、技術・職業教育論
准教授	近田政博
	専門領域：比較高等教育学、学習支援
准教授	中井俊樹
	専門領域：大学教授法、高等教育マネジメント
助教	齋藤芳子
	専門領域：科学技術社会論

研究員	久保田祐歌
研究員	安田淳一郎
<平成21年度 海外客員>	
サイド・ベヴァンディ	(パリ第8大学)
孫 準鐘	(韓国教員大学)
<平成21年度 国内客員>	
荒井克弘	(東北大学)
小林信一	(筑波大学)
大場 淳	(広島大学)

名古屋大学高等教育研究センター

〒464-8601 名古屋市中種区不老町
Tel 052-789-5696
Fax 052-789-5695

E-mail info@cshe.nagoya-u.ac.jp
URL http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/